ネットワーク参加者 募集

〒100-0013　千代田区霞が関3-3-1　尚友会館６Ｆ
全国道路利用者会議内
「道路ユーザーネットワーク」係
http://road-jhuc.jp

道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK　NETWORK

平成26年度『道路ふれあい月間』推進標語
最優秀賞
『子や孫につなげていきたい道がある』

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

三好礼子
エッセイスト・国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

「地球ランナー」がぴったりの女性が居ます。夫のスティーブさんと共に1989年より80ヶ国1万2千キロを自転車で回っていたシール・エミコさん（50歳）。自転車の前には20代でバイクで日本一周しており、その頃からの友人です。実は16年前、77ヶ国目のパキスタンで倒れ、緊急帰国すると子宮がんで余命半年と宣告され、手術。以来、想像を絶する治療をしながらも医者と相談し、資金を貯め、3回も奇跡の旅（インド・ネパール・チベット・ラオス・タイ）を続けました。20代から旅の記録を各紙で書き綴っていたエミコさんですが、後半生は再発・転移を繰り返した為、重い病いと闘いながら世界一周を目指す、「いのちのペダル日記」となりました。

カメラマンのスティーブも膨大な記録をまとめている。二人は間違いなく伝道師。

いつでもどの国でも笑顔でコミュニケーションが旅のベース。メキシコの少女たちと。

そのチャレンジの様子は「NEWS23」や毎日放送のドキュメンタリーで幾度も流れたので、ご存知の方もいるかと思います。根っからの旅&人間好き。廻りを幸せにしてくれる懐っこい笑顔。気遣い。最愛のスティーブとの二人三脚。その類を見ない生き方は、誰をも魅了し、「第2回モンベル・チャレンジ・アワード」「フジグローブ賞」「世界熱愛生命賞」などが次々と授与されました。

想像を絶する痛みが伝わってくる中、「伝えることが生きること」ばかりに著書『がんを越え めざせ地平線！！』を書き上げ、身体の様子をみながら行われていた講演会では、その明るさとパワーにどれだけ多くの人が勇気づけられたことか。けれど、とうとう日本での治療方法がなくなり、5年前からスティーブさんの故郷、メルボルンに滞在。そして、日本へ戻ってきた時には、彼女たちを応援する（愛する）仲間が集まり、エールを送ります。祈ることしかできないけれど、大切な何かをずっと彼らから学んでいるような気がします。

楽しくも長く厳しい旅は、どんな状況でも諦めない魂を作りあげた。アルゼンチンにて。

エミコさん、ピンク色のバイクと革ツナギで日本一周ツーリングをしていた頃から、とても気になる女性でした。愛らしいその笑顔は、会った誰もがすぐに虜になってしまい、私は勝手に妹に任命。会った誰もがそんな風に思うので、日本だけでなく、世界中に家族がいたはずです。がん宣告をされて入院したと聞いた時、居ても立ってもいられず、すぐに大阪の病院へ向い、自分なりに出来る事をしようと通い詰めましたが、私に出来るのは、話を聞く事くらいでした。「なぜ病気になったんだろう」「癌は何かを教えに来てくれたんじゃないのかな」から始まり、とうとう「癌ちゃんって名前をつけて小さくなってもらおう」と。冗談のような話ですが、彼女の思い方が大きく変わると、開腹できないほど育っていた癌が奇跡的な早さで小さくなり、手術が可能に！そして子宮摘出。旅を終えたらスティーブと子供を作って静かに暮らす夢は叶わなくなったけれど、地球上の子供がすべて自分の子になったと言います。旅で知り合ったネパールの孤児のために自ら基金を作って奔走したりと、他者にも献身的な日々。回復を願う人々にとってはドキドキでしたが、そちらもみんなで応援しました。

5月、大阪で「一時帰国祝いと、世界一周のゴールを目指す再々の『再』スタート走行会」が開催された。久々の再会だった♪

何度電話したことだろう。何度訪ねたことだろう。以前住んでいた朝霧にも来てくれましたが、予定直前に癌が再発して倒れた時は、すべてを放り出して飛んで行きました。その頃二人は奈良の古民家を借り、スティーブは大阪まで自転車通勤する英語教師、彼女は庭で自然農法の野菜を作っていました。どの野菜も彼女の愛情で幸せそう。ゆっくりと庭を散歩し、蓮の花を見ながらたくさん話けれど、どの時間も光景も愛おしかった。慎ましやかに過ごしながら資金を貯めて旅していた二人の地球生活も見えて感動したっけ。

エミコさんが大好きだった同じ自転車仲間の忌野清志郎氏は、後に癌で急逝。彼女が闘っている間、私の知り合いも同じ病いで幾人もがこの世を去っていきました。冗談で「最後に残るのはエミちゃんなんじゃない？」と言い合ったり。でも、「もう限界」とぼつり書かれたブログの文字。生きているのが辛いほどの痛みの中で、我々応援団は見守るしかできないけれど、一日でも笑って命長らえて、そしていつか世界一周のラストに向けて走り出してもらいたい。

・・・そう思って出向いていった先日の壮行会ですが、なんとエミコさんの瞳は、今までになく希望に満ちていました。「あと2年大丈夫だったら、世界一周のゴールを目指したい！」と公言してくれたのです。3年前にオーストラリアで骨盤内臓器を全て摘出し、骨を削って内部から削るという手術を受け、2年前に癌は消滅。でも、ダブルストーマとなり、腸閉塞などの後遺症と痛みにずっと悩まされていた。今も車椅子が欠かせませんが、座るタイプの自転車での再開への道が見えてきたという。元気が伝わってきて、励まされたのは参加者の方でした。生きていることが奇跡なのに、大地を走る夢を決して諦めないエミコさんとスティーブ。これからも最大級のエールと愛を送り続け、私も一緒にゴールしたいと思いました♪

「道路」を表す言葉④

「ジャラン」をめぐる海の道

東洋大学国際地域学部・准教授
志摩憲寿

日本の旅行雑誌やホテル予約サイトでも知られる「じゃらん」、これと同じ言葉がインドネシア語にあります。インドネシア語で「jalan」といえば「道」などの意味で、接頭語berを付けた「berjalan」は「歩く」、「jalan-jalan」と重ねれば「散歩」という意味になります。実は「jalan」という言葉はマレー語でも同じ意味、そのほかにも、インドネシア語でもマレー語でもタガログ語でも「右」といえば「kanan」ですし、インドネシア語が話せればマレー語で苦労することはありません（そもそもインドネシア語がマレー語ベースでもあるのですが）。言語学的にみると、インドネシア語やマレー語、タガログ語などが含まれる、島嶼部東南アジアの言語は「オーストロネシア語族」という言語に分類され（それに対して大陸部は「オーストロアジア語族」と分類されます）、これには、同じ単語が使われているだけでなく、単語の形が変化せず文章の意味が単語の配列によって決まること、単語に様々な接頭辞・接中辞・接尾語がついて意味を明確にする場合が多いこと、同じ単語を重ねて意味を強調することなど、言語上の共通点も多いと言われています。こうした言語の共通性からもアジアの海の道が感じられます。

その言語の共通性、何も島嶼部東南アジアで閉じられている訳ではなく、はるか日本ともつながっているものもあります。室町時代の末期以降、南蛮貿易で日本人の海外進出が進むと、マニラやアユタヤなどで日本人街の建設が進みますし、フィリピンやポルトガル、スペインなどから日本に渡る人も現れましたから、「南蛮」から様々な文化が取り入れられてきたことは自然といえましょう。例えば、南蛮煮や南蛮焼き、鴨南蛮そばにもネギが使われていますが、これは当時日本に住んでいた「南蛮人」が健康保持のために毎日ネギを食べていたことに由来するそうです。

言葉でたどると、インドネシア語で「混ぜる」といえば「チャンプル（campur）」。何か似た言葉を思い出しませんか？　そうです、有名な沖縄料理「ゴーヤ・チャンプル」。ゴーヤに野菜や豆腐が混ざっています。長崎の「ちゃんぽん」といえば、「古墳の上側にかけてあるものをしらべると多量のキャベツやキノコや肉などを原料に支那と日本の中間的なウマニに煮たもの」（坂口安吾、原文ママ）、麺も具もごった煮にしていただきます。もともとちゃんぽんは、明治時代中期、長崎の中華料理店「四海楼」の主人が、中国人留学生に安くて栄養価の高い食事を食べさせるために考案したとも言われていますが、お店の名前もさることながらその語源もまた海の道を感じさせます（実はちゃんぽんの語源にはオランダ語や福建語由来という説もあります）。その長崎ちゃんぽんで有名な「リンガーハット」は、日本国内での店舗展開に加えて、タイや中国に「輸出」、さらにアメリカにも進出しているといいますから、海を越えて日本へやってきた「ちゃんぽん」がまさに世界への海へとつながろうとしている訳です。

さて、今回は海で繋がったアジアを「ジャラン・ジャラン」してみました。言葉一つをとっても海や陸の道が見えてきます。

（参考文献）石澤良昭・生田滋（1998）「世界の歴史13　東南アジアの伝統と発展」中央公論社、清水桂一（編）（2012）「たべもの語源辞典　新訂版」東京堂出版

ハッと思いました

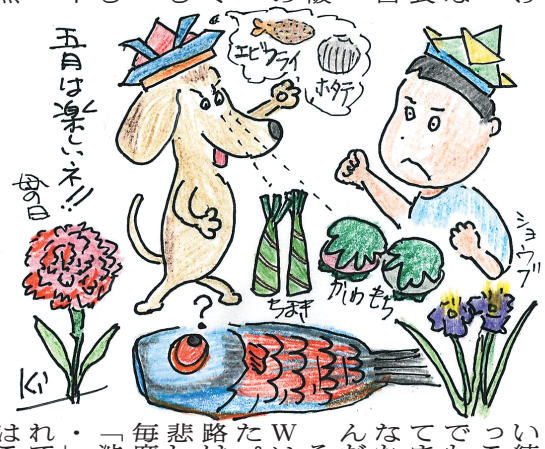
先月は「四月の雪」、「桜の花に白い雪」でした。北国ではそれほど珍しい事ではないかもしれませんけど。「四月の雪」と言えば私の中では名曲「なごり雪」がまず浮かんできます。「汽車を待つ君の横で僕は時計を気にしてる・季節外れの雪が降ってる・・・」。このシチュエーションは現在では想像も付かない光景ですね。今だとおそらく「クルマのドアをバンッと閉めて・・・行っちゃった」で終わっちゃいますね。そもそも汽車＝SL（スチームロコモティブ）も骨董品のようなもの、その頃の記憶と思い出がたっぷりの私の頭も骨董品かな。

高速道路や新幹線は移動手段として、スピードアップや大量輸送、観光の発展などに多大な影響を与え成果を上げています。

しかし、新たな交通網の計画が表に出ると必ずと言っていいほど、「無駄だ。自然破壊だ。」と非難の対象になります。ところがもうすぐ開通とか、開通しましたとなると、非難の声は一転してバラ色のニュースとなります。

報道の節操の無さには閉口します。骨董品の頭で学んだ事の一つとして、与えられるニュースは鵜呑みにしてはいけない。しないと言うことです。

つくづく思うのは、自分で考える事の重要性と必要性です。情報を入手したら内容を精査して自分のものとして理論建てをする。



「あの人がそう言っていたから・」「誰とかにこうしろと言われたから・」など低俗な言い訳は、格好が悪いですからね。

骨董品の頭でも、日頃から油をさしながら使い続けていれば、けっこういけますよ。でも「いぃ～仕事してますねぇ～」とはなかなか言われませんが。

それでも五月のGWはやってきました。観光地や高速道路はいつもの渋滞と悲しい事故の多発。毎度のことですが、「渋滞の原因は・・・」と特集が報道されていました。内容はこれまた毎度同じです。新しく開通した路線や改良された箇所でも、いつもと同じ原因で渋滞等の問題が起きているようです。不思議に思うのが、以前から渋滞原因が研究されているのに、なんで同じ原因で渋滞が発生する新しい箇所が生まれるのか？です。「なんでだろう？なんでだろう？」思うに、絶対的にクルマの数が多すぎるのでは・・。そして、クルマの性能の向上に反比例してドライバーの技術・意識が低下しているのではないのか・・なんてね。

今後、2020年のオリンピックに向けて、首都圏を中心に景気も良くなってくるでしょう。そしてその報道は、まるで日本全体が良くなっているように伝えるでしょう。その時にはしっかりと自分で考えましょう。日本は小さい島国ですが、バリエーションあふれる地方が沢山繋がった国ですから。